

紙つて

「人間の生きる意味は何だろうか」。五十年以上も昔、終戦後日本が復興に向かう中、それが、定まらないう未来を模索する学生たちの議論の中心だった。今、豊かな世に育った若者たちから聞こえてくるのは「このままが良い」。七面倒くさい話はまっぴららしい。

人生論に無頓着な彼らも、たった一度の人生、まっぴら「自己実現」ではないのか。人それぞれに目標を設定して挑戦する。この達成こそが生きがいになる。加えてわれわれは「世代の継承」のために生きていく。生物のヒトとして、本能的に種の保存、遺伝子の伝達のために生きる。人間は社会的存在だから、広い意味での文化の伝承のためにも生きていく。筆者の人生観だ。

生きる意味

のより 良治
野依

ハイデッガーは人類は「必滅に臨む存在」だとした。生は偶然、死は必然、個人のみならず人類全体も五百万年後には大氷河期を迎え、決定的影響は免れない。しかし、決して自らの愚かな行為で破滅する存在であってはならない。最大限生きる努力をしたい。

国家としての日本についても同じ。広く人類社会を見渡せば、人口爆発、地球環境の変動、エネルギー資源の枯渇などにより、現代文明は危機にひんしている。日本も問題解決に貢献すべきだが、人口減少時代を迎え、財政も一兆円超の公的債務を抱えて低迷する。成り行き任せ、他国のせいにしても始まらない。各界の指導者たちには、現実を直視した上で、自らの国の方向を決定する気概と覚悟が求められる。

(理化学研究所理事長)